

3.27 エーデルワイス

先月、「サウンド・オブ・ミュージック」でオーストリアから脱出したフォン・トラップ一家の最後の一人の女性（次女）が亡くなったというニュースが流れました。戦後すぐに生まれた私があと数年で 70 になろうとしているのですから、不思議ではないのですが、映画「サウンド・オブ・ミュージック」の印象が強いせいか、時の流れの速さを強く感じました。

たまたまなのですが、今日の午後、NHKのBSで、この映画を放送するのを知って、またまた見てしまいました。

もう何回目になるでしょうか、大学1回生のときに初めて見て以来、数え切れないほど見ているのに、見る度に新しいものが見えてくるのは、この映画がいい映画だからに違いありません。

一昨年、ザルツブルグとザルツカンマーグートを巡り歩いてきたからでしょうか、映画の中で登場する風景のなかの風が耳元を通り過ぎていくようで、思わず、流れる歌を口ずさんだのは、現実と夢が交錯したからだと思います。

この映画の中で、私が一番好きな歌は「Edelweiss」。映画の中では、フォン・トラップ大佐が歌っていましたね。

この映画を初めて見たときは、私、この歌、オーストリアに古くからある歌だと思っていました。

だって、エーデルワイスは、オーストリーの国花。

その国花に祖国の永遠の幸せを願う心を託して歌うこの曲に、深い祖国愛を感じたからです。

ちなみに、映画の中で歌われた英語の歌詞は、

Edelweiss edelweiss

Every morning you greet me (greet: 挨拶する)

Small and white clean and bright

You look happy to meet me (look happy: 幸せそうに見える)

Blossom of snow (Blossom: 花)

May you bloom and grow (May+主語+動詞: 主語が**することを願う)

Bloom and grow forever (forever: 永久に)

Edelweiss edelweiss

Bless my home land forever (Bless: 祝福する、home land: 故郷)

でもね、今、この歌詞は、日本では、次のように歌われています。

♪ エーデルワイス エーデルワイス かわいい花よ
白いつゆに むれて咲く花 高く青く光る あの空より
エーデルワイス エーデルワイス あかるく 匂え

♪ エーデルワイス エーデルワイス ほほえむ花よ
悲しい心 なぐさめる花 はるかアルプスの峰の 雪のように
エーデルワイス エーデルワイス かがやけ永久に

元の英語の歌詞と比べて欲しいのですが、この訳は、この歌の本質である「祖国への愛」を無視していることがわかります。

私が、サウンド・オブ・ミュージックで感動した「ナチスに統合された祖国」を去らざるを得ないトラップ大佐の心が、どこにも見当たらないのです。

私には、この歌詞を中学校の音楽教科書に採用した文部科学省の気持ちがわかりません。

この歌は、ロジャース&ハマースタインのコンビによって作られたサウンド・オブ・ミュージックの多くの素晴らしい歌の中でも、最も素晴らしいもののように私には思えます。がんに冒され、死の床にあったオスカー・ハマースタインが最後の力を振り絞って書いたといわれるこの歌が伝えるものを、どこに見出すことができるのか。

エーデルワイスは、オーストリーの国花であると同時に、最愛の人に捧げる花とされています。

私は、前のザルツブルグ行で、この花をどうしても見たいと思い、探し回り、そして、チロルのグロス・グロックナーの麓の教会の墓地で、咲いているエーデルワイスを見付けました。

写真は、その墓地とエーデルワイスです。





これは蛇足ですが、

[拙訳]

- ♪ エーデルワイス エーデルワイス
朝（あした）の光の中、君に会うたび
その小さき白き清らかな 顔容（かんばせ）が
輝く気がして、私は幸せに包まれる
- ♪ 雪のような花よ
願わくば永遠（とわ）に咲き、永遠に香れ
エーデルワイス エーデルワイス
我が祖国に永遠の幸を

9.7 「RAILWAYS 49歳で電車の運転士になった男の物語」

先日、会津鉄道のことをお話しましたが、今日は、少し古い話なのですが、今年の5月末から7月にかけて上映された「RAILWAYS 49歳で電車の運転士になった男の物語」について、少し書きたいと思います。

この映画は、大変すぐれた映画でしたから、多くの方がご覧になったと思いますし、おそらく、この映画についてブログに書かれた方も多くいると思います。

この映画をご覧になった方にはご迷惑ですが、ご覧になっていない方のために簡潔にストーリーをお話ししますと、

中井貴一さんが演じるのは、役員目前の大手電機メーカーの部長で、社員のリストラを命じられて、同期で親友の技術畑の工場長に工場の閉鎖を頼むところから話が始まります。会社のために非情にリストラを進め、仕事に追われ、家族を顧みない彼に、故郷島根の母が倒れるという事件が起こります。母の見舞いもそこそこに東京に帰ろうとする彼に対して、反発する大学生の娘。工場の閉鎖作業を終えて、彼の慰留を断って退職した後、急死する親友。

苦悩の末、母の介護に当たるために退職しようと思った彼を慰留する役員に対して、彼の言葉が印象的でした。「自分自身をリストラしようと思います。」

故郷に帰った中井は、一畑電鉄の運転士募集の知らせを見て、幼い頃の夢を実現しようとしています。

年齢のハードルを乗り越え、苦勞の末に新人運転士となった中井を巡る様々な事件を通じて、仕事への誇り、生き甲斐、母や妻や娘との心のつながり、人間として大切なものは何か、生きるとはどういうことかというテーマが語られている映画です。

一畑電鉄は、島根県出雲市を中心として、宍道湖の沿岸を走る大変美しい沿線を持つ私鉄です。

映画では、この美しい風景の中を「バタ電」がコトコトと走るシーンが何度もあります。私は、この風景を見るだけで何とも言えず心が温かくなる思いがしました。

先日NHKで会津鉄道の新人運転士が一人前になっていくドキュメントを見て、数ヶ月前に見た「RAILWAYS」の感動が突然浮かんできたのです。

私ごとになりますが、私の40年来の友人が、2年ほど前に、ある政府系金融機関の役員(理事)の地位を棄てて、僧侶になりました。彼は、禅宗の僧侶になるため、厳しい2年間の修行を遂げ、今単身で故郷出雲斐川の寺の住職を務めています。

「RAILWAYS」を見た後、彼に電話をかけて、近いうちにいくよ、待ってるよというやりとりをして、2ヶ月少しになります。

昔若い頃に乘ったバタ電の車窓から、秋の宍道湖に落ちていく本当に美しい夕陽をもう

一度見てみたいと思っています。

「RAILWAYS」は、10月にはDVDが発売されると聞きました。



10.17 ウェストサイド・ストーリー

今日は、私以外の人間にとっては、面白くも何ともない思い出話。

先週、NHKの衛星放送で、ウェストサイド・ストーリー（*West Side Story*）を放送していました。

ニューヨークのウェストサイド地区でのイタリア系アメリカ人の若者のグループとプエルトリコ移民の若者のグループの対立抗争とその中で生まれた悲恋を描いたこのミュージカル映画に、若い頃の私は大きな影響を受けました。

レナード・バーンスタインの作曲になるこのミュージカル、ロバートワイズ監督の素晴らしいカメラワークと息もつかせぬ激しいダンス、邦画を見慣れた私にとって、全く新しい世界でした。



この映画がわが国で上映されたのは、昭和 36 年、私が中学 3 年生の時でした。

当時の私は、バーンスタインの名前も知らず、NYのウェストサイドがどのようなところであるかも知らない、単なる高校受験生でしたが、この映画だけは、なぜかどうしても見たいという気持ちが強く、母にしつこく頼んだものです。

困り果てた母は、私一人を遠く都会の映画館に行かせるわけにも行かず、隣の家の奥様の姪（独身OL）にお願いして連れて行ってもらうことになったのです。

私は、年上の女性と出歩くことが大変恥ずかしく、難色を示したのですが、この映画を見たいという気持ちには勝てず、日曜日に彼女に連れられて出かけていきました。

この映画の冒頭は、ヘリによる空撮で、NYのウェストサイドに延々と立ち並ぶアパート群を上空から眺め、そのまま、その一角にある金網に囲われた荒んだバスケット場にズームインしていくのですが、私は、冒頭からこの撮影の見事さに心奪われ、この映画が終わるまで隣の年上のお姉さんのことをすっかり忘れていました。

今から思えば、ウェストサイド・ストーリーは、現代版ロミオとジュリエットに他ならないのですが、当時は、それすら気付かず、バーンスタインの数々の名曲に引き込まれ、ダンスのすばらしさに目を見張りました。

J・チャキリスのダンスに、どうしてあんなに高く足が上がるんだろう、どうしてあんなに早く軽々と動けるんだろうと思い、マリアとトニーが歌う「トゥナイト」に感動し、一度で良いから、誰かに「*sleep well, and when you dream, dream of me*」と言ってみたくてと思ったものです。

最後に、トニーが撃たれ、マリアの腕の中で息を引き取る際に、マリアが言った言葉、「*テ・アドロ アントン (愛しているわ、トニー)*」には涙が止まらず、そのときだけは恥ずかしく思ったことを思い出します。



これが、私がはじめて見たミュージカルでした。

私は、幸運だったのかも知れません。

初めてのミュージカルがバーンスタインの名曲であったということだけでも。

私は、この映画の後、そこで歌われた歌の歌詞を知りたくて、LPレコードを買うために、およそ3ヶ月間、小遣いを全く使わず、ひたすら貯めました。

いまでも、トゥナイト、マリア、アメリカ、アイフィールプリティなど、殆どの曲は歌えます。

私の懐かしく、そして大切な青春の一コマです。

12.1 映画「武士の家計簿」を見て

新潮新書の「武士の家計簿」を読んで、こんなのホントに映画になるのかなあ、と思っていたのだけれど、さすがは森田芳光監督、ちゃんと文句のつけようもない映画になっていました。

もう見られた方、これから見ようと思っている方、どちらの場合も、私個人の感想など申し上げるのはどうかなと思いますので、今日は、ちょっとだけ、私が気づいてニコッとした話。

その一連のシーン。

映画の中の語り手は、主人公猪山直之（堺雅人）の子供に当たる成之なのですが、この成之、満七才で、父直之から、筆とソロバンの英才教育を受けます。

父直之は、幼い成之に猪山家の毎日の家計を任せるのですが、その成之、ある日、可哀想に銭入れを手から落として、4文足りなくなってしまう。

父から自分で何とかしろと言われた成之、雨の中を、落とした井戸端を必死に探すのですが、見つかりません。

人から借りてはいけないと父から言われた成之ですが、手立てが無く、おば様から借りてしまい、父には河原で拾ったとウソをつくのです。

ウソを見抜いた父直之から、元のところに捨ててこいと言われた成之、ついに頭にきて直之に掴みかかるのですが、突き飛ばされて頭に傷を負います。

その後のシーン、頭に手拭いで包帯をした成之が、何度も何度も迷った末に、遂に、川の方を見ないで1枚の銭を投げ込むのです。

この一連の場面のどこが良いの？

そうなんです。

私は、森田監督の映画が好きでよく見るのですが、私が最初に首をかしげ、その後で目を見張ったのは、その銭が「波あり寛永通宝」だったことです。

成之が雨の中を無くした4文を探し回るシーンで、4枚の銭であれば、どうしてあんなに探し回って1枚も見つからないのだろうかというのが、私が首をかしげた最初の疑問。

次に、成之が川の中に投げ込んだ銭は1枚。4文であるはずなのに、どうして1枚？

このシーンで、森田監督は、寛永通宝には、1文銭だけでなく、裏に波が描かれている4文銭があることを伝えているのですね。

この監督のメッセージに気づくのは、映画を見た人の中でも僅かかも知れませんね。でも、これに気づいた人は、ずっと、この監督の映画を見続けるでしょう。次に、どんなメッセージが伝えられるか、ドキドキしながら。

これだから、映画はやめられないのです。

この時、成之が額に負った傷は、成人して明治政府の主計大監にまで上り詰めた成之の額にも微かに消えずに残っているのですが、父直之の悔恨の気持ちと母お駒さんの成之に対する愛おしい気持ちの象徴として、また、ご算用者の一家の誇りと家族愛の大事なシンボルとして、この傷は、わかるかわからないか、それほどの微かさで描かれています。

良い映画って、やっぱりいいものですねえ。

なお、寛永通宝の波あり4文銭って何？

と思った方は、「銭形平次と銭形警部」（江戸の世界参照）をご覧くださいければと思います。

ちなみに、下の写真の一番上が「波あり4文銭」

